日本最北端のハクチョウ類　（１９７７）

山　内　　昇

３月１８日（１９７７年）北帰行する白鳥の第一陣がクッチャロ湖に渡来した。この頃のクッチャロ湖は一面の氷原であり、何時解けるとも知れぬほど厚い氷で、川口近い鉄橋の下方が少し水面があるのみであった。飛来した白鳥たちは氷原に仮泊したものの餌を採ることができなく、上空から見て一番氷の薄いような所に、氷の下にある餌を求めて十日間以上も待つことは例年の通りである。日中は太陽熱で氷上にできる水溜に群がり、夜はその水溜りが氷点下１０～１５度に下るため、白鳥たちは凍結して身動もできない。健康な鳥であれば両羽が凍るような姿勢で寝ることなどないのだが、何日も餌の採れない白鳥の疲労は極限状態であり、太陽の上るまで身体を氷から離すこともできない。このような朝には、オジロワシやキツネに捕食されるのを毎年のように観察している。1972年の春以来少しであるが給飼している。４月初旬までの給餌は大変である。氷が解けると、こんどは春水で増水し、海水湖のため満潮時には水面があっても採餌はできない。そのため餌場（人工）には、多いときは２００羽～３００羽も群がることもあり、過保護にならぬよう湖の採餌場の水面の開くまで、一日一俵ほどのエンバクを与えている。北帰行の折に当地方に集結する白鳥は、温暖な本州各地で越冬し、人工の餌を食っているため、ここに群がる白鳥も空き腹とはいえすぐ人工餌につきやすく、それだけに個々の観察もやりやすい。
秋シベリヤ方面から渡来したときは、黒子と呼ばれる幼鳥と白い成鳥体ともに鮮明であるが、春に集結する時はさまざまに羽毛が染っていて、日本の越冬地の環境汚染のバロメーターのようである。汚れのひどいのは、成鳥であっても黒子（幼鳥）と見間違うようなものから、赤顔というのか首から顔にかけて鉄錆色の個体が多く観察される。

当地方で、各地の観察者たちが一同に会し、白鳥を観察することができれば白鳥の保護について色々な問題を提起することができると思う。クッチャロ湖では1975年以来コハクの幼鳥に001Ｙの首環標識を付けて放鳥した。その白鳥は日本の越冬地の各地の方々から観察の報告をいただき、最上川から北上したとの便り（酒田市阿部氏・日本白鳥の会会員）中継地の千歳の弁天沼で確認したという便りもいただいた。クッチャロ湖に元気に飛来した日は奇しくも１９７６年４月１４日で、放鳥日より丸一年ぶりであった。この再会した感激は鳥きち冥利につきるものと、ただただ夢中になり餌を与えた。また、017Ｃ（ソビエトで放鳥の赤首環）。伊豆沼等で観察していたアメリカコハクの成鳥体等を一度に観察できたのはクッチャロ湖以外はないのではないか。中でもアメリカコハクの幼鳥と思われるものを初認したとき、日本白鳥の会を通じて問い合わせたが、そのような白鳥はほかには観ていないとの返事。私の考えるのにコハクもアメリカコハクも繁殖地は同一地帯ではないかとさえ思う。

1976年４月には皆さんの協力を得て９羽のコハクに標識放鳥ができ、調査上貴重な体験をした。この地方で残留越夏するのではないかと追跡調査した。その中に017Ｃの亜成鳥（赤首環）がいた。これだけは何としても繁殖地へ帰してやりたかったが、クッチャロ湖に飛来時より換羽期まで観察した。
この017Ｃにかけた期待は大きかっただけに、当地方で落鳥になったことは残念でならない。また、この標識鳥の死亡により、この地方の野性動物（野鳥も含む）の生活のバランスについても大変勉強になった。また、この地域で残留したグループには成鳥は入ってなく、全て亜成鳥であった。これは、直接

繁殖に関係がないため残ったものと思う。成鳥は性ホルモンの分泌に急き立てられ渡去するものと思う。亜成鳥群を観るときにはそのような形跡は全くなく、ただ食い気だけは盛んであった。春の気温の低いうちは繁殖地の気候と似ていたかも知れないが、1976年の夏は当地方の新記録ともいわれるほど、雨も降らず干魃に悩ませられた年でもあり、残った白鳥たちも水温が高温になるため、水鳥でありながら陸鳥のように木陰に入ったり、草原の中に身を隠したり大変苦労をしていた。ある時は水辺から100メートル～150メートルも離れた牧草地の中で寝ていたこともあった。これでは換羽して飛べない鳥であれば、野犬やキツネの餌には格好の獲物であろう。

当地方には最高何千羽の白鳥が飛来するのかということについては、最高時にカウントすれば良いのだが、クッチャロ湖は周囲26㎞もあり、それに春の氷上でのカウントは白対白であり、よほど天気の良い日でなければ正確なカウントはできない。飛来期間も40日間以上もあり、最初飛来したものは10日～20日ぐらいで、一部はポロ沼、一部は樺太方面の繁殖地へと飛去るため、その年によっては2,500羽から3,000羽と違うこともあり、確実な数をとらえることは不可能と思う。クッチャロ湖の羽数プラスポロ沼・猿骨沼の3ケ所と樺太方面へ飛去った羽数を合わせなければ確数とはいわれない。1976年4月13日のカウントでは、オオハク40も加え3,140羽プラス樺太方面への500羽を合わせると3,600羽余となる。

当地方で一時期にカウントするのは4月10日前後であるが、この後も5月10日頃まで白鳥の北帰行があるので数についての正確さには少し問題があるが、飛来数の90パーセント以上の白鳥はコハクであることは確実である。当地方の湖で見るかぎりオオハクを観察するのは至難であり、白鳥の観察者で著明な方でもクッチャロ湖で白鳥を観ているとオオハクなどと錯覚さえしているほどである。北海道の飛来地は道北地方はコハク、道東地方はオオハクが飛来するのだと決定しても過言ではあるまい。逆に道東地方へ調査に行ってコハクを探すのも至難である。

このコハクの飛来湖のクッチャロ湖も1976年夏期間の干魃のため、海水湖でありながら白鳥の飛来場所には川水が注ぎ、その附近は淡水藻が密生していた。河川そのものも干魃のため流入する水が少なく、水温が上って酸素欠乏のためかプランクトン・小魚等が死んで浮上した。同時にその地域の水草も枯れ、8月の中旬頃には湖の中に島ができたように浮上し流れ出した。例年なら水深1メートルほどの湖は舟外機つきの舟で走るのはプロペラに藻が巻付くため大変至難なのだが、この夏はそのようなことは全く無く、どこでも楽に走れる湖であった。そのように水草のない湖には白鳥の渡来期になって、飛来はしたものの餌はなく、その位置（藻のある所）には着水してもすぐ飛立つため、秋の渡来期には見るべきことは全くなく、最高時でも500羽も数えることができなかった。また天候が悪かったり、私事の都合で調査のできない日もあったので正確なことはいえないが、飛来しても一日か二日で飛去るのは湖の藻との関係にほかならない。湖畔の人里近い所に採餌していたことが、本秋の特色のようである。

秋期の観察では、ソビエト・チュコト半島・チャウン湾で1976年8月標識放鳥されたコハク幼鳥は（放鳥時二巣・10羽）クッチャロ湖で確認された。月日別に2度、8羽。（ソビエトで放鳥してクッチャロ湖に飛来するまでに2羽行方不明のグループ）この報告書を作成中に宮城県の小杉貞理子さんよりの便りで、1月中旬、北上川河口で018Cソビエト標識放鳥赤首環つきが、ハンターに至近距離から散弾で打ち殺されたという報らせがあった。猿骨沼で留鳥になり、オジロワシの餌になった赤首環標識鳥017Cと018Cとは1975年標識鳥の一巣の中の兄弟であり、018Cの殺されたのは残念でならない。

なんという法治国家なのだろうか。世界の鳥類学上の貴重な財産を失なったような気がしてならない。この018Cは3年目にして日本で初認されたもので、翌春にはあるいは一番のカップルが誕生したかも知れない。

クッチャロ湖は樺太に近い地域であり、越冬地の日本とソビエトとの白鳥の保護を通して国際的な交流を深めようとしていた矢先のことであった。他の標識鳥たちも本州各地で継続観察していると聞くが緑・赤ともに何羽が厳しい冬を過ごして帰北することができたか待遠しいこのごろである。